

令和5年度東アジアプロジェクト研究報告

○プロジェクト名

東アジアにおける文化伝承の研究

○研究組織

代表者：高橋征仁

メンバー：速水聖子、柏木寧子、小林宏至、森野正弘、尾崎千佳、更科慎一、上田由紀子、
谷部真吾、横田尚俊

○具体的な実施内容

(1) 国際学会発表

小林宏至, 2023, 「社会人類学的視点からみた家族アニメと日本社会」, 貴州大学中日文学文化交流会, 貴州大学 (ハイブリッド)

小林宏至, 2024, 「現代漢族社会における親族組織とサイバー空間」, 国際シンポジウム「移民ネットワークとメディア—紙媒体からサイバー空間まで—」, 北海道大学メディア・ツーリズムセンター

更科慎一, 2023, 「乙種本『百夷館訳語』来文の百夷文字表記漢語について」, 五言語合璧「普度明太祖長卷」国際シンポジウム, 京都大学人文科学研究所

更科慎一, 2023, 「明代中国人の外国語研究について」, 貴州大学中日文学文化交流会, 貴州大学 (ハイブリッド)

更科慎一, 2024, 「乙種本《华夷译语》“来文”里的民文-汉字对音」, 中国語言歴史地理研究論壇 2024, 青山学院大学 (オンライン)

高橋征仁, 2024, 「美男子平均顔における<やさしさ>の進化」, 貴州大学中日文学文化交流会, 貴州大学 (ハイブリッド)

上田由紀子, 2024, 「日中英語における空項（音のない文要素）に関する統語論研究」, 貴州大学中日文学文化交流会, 貴州大学 (ハイブリッド)

森野正弘, 2023, 「『源氏物語』における音楽の相承」, 四川外国語大学日本語学院・公開講演会「東アジアを交錯する古典文芸」, 四川外国語大学 (ハイブリッド)

(2) 国際共同研究

(中国語への論文翻訳)

小林宏至, 2023, 「作為社会性地址都宗族 (原題:社会的住所としての宗族)」, 郭睿麒 (訳), 『鶴湖文史輯刊』, 文物出版社, 北京, pp.245-270

(国際共著本)

小林宏至, 2023, 山藤夏郎・林承緯・柳瀬善治・陳志文・楊素霞・榊祐一・羅曉勤 (編), 『日本學指南: 100本研究日本人文科學領域主題の經典專書』, 五南圖書出版

(進行中のプロジェクト)

高橋征仁, 2023, JACSIS研究 (新型コロナによる社会・健康格差評価研究)

高橋征仁, 2023, 「戦後日本における安全・安心パラドックスの解消」, 統計数理研究所共同利用
重点型研究

○波及効果

東アジア研究科修士生の協力により、貴州大学中日文学文化交流会を開催することができた。またそれ以外にも各教員が、国際的研究活動を展開し、成果目標を大きく上回ることができた。こうした国際研究の展開によって、研究水準の高度化や文化の相互理解が進められるだけでなく、修士生・在校生、入学希望者の将来像の具体化にもつながると考えられる。

○今後の方向性

今後とも、東アジア研究科修士生のネットワークを活用しながら、国際的共同研究の活性化や、学生・教員の流動化を促すことで、入学希望者の増加を図っていくことにしたい。

○プロジェクト名

アジアの教育と文化におけるグローバル化

○研究組織

代表者：高橋俊章

メンバー：有元光彦、石井由理、葛崎偉、佐々木司、鷹岡亮、中田充、松岡勝彦、森下徹、北沢千里、山本冴里、森朋也、山本孟

○具体的な実施内容

東アジア研究科で学ぶ大学院生だけでなく、本コースを修了し、海外の研究機関に在籍する研究者とともに共同研究を行い「東アジアのグローバル化と教育」をテーマにしたシンポジウムを開催する準備を行った。具体的な内容としては、中国・台湾・インドネシア、ベトナムなどを含むアジアにおけるAIの社会や教育における活用、アジアにおける教育支援や複言語教育の違い、日本と他のアジアの国を対象とした言語、音楽などの文化、国際化のイメージの比較に関するものなど、国際理解教育や東アジア地域の社会・教育・文化・歴史に関する研究を共同または個人で行った。また、それ以外にも、東アジア研究科を修了した研究者や東アジア研究科で学ぶ大学院生とコラボ共同研究を進めることにより、来年度開催するシンポジウムで発表に向けた研究成果の蓄積を行った。

○波及効果

東アジア研究科修了生との間の研究交流・共同研究を教育開発コースとして恒常化させることで、今後も東アジアの若き研究者と関係を継続し、今後長期に渡ってまた、東アジアにおける大学とのつながりを発展・継続させることが期待できる。

○今後の方向性

来年度、これまでに築いてきた大学間の関係と、蓄積してきた研究成果に基づいて、2024年度の12月頃までには、東アジア国際学術フォーラムをハイブリッド形式で開催し、翌年度の出版事業につなげていく予定。

○プロジェクト名

東アジアを中心とする世界経済社会に対する感染症問題の影響

○研究組織

代表者：濱島清史、古賀大介

メンバー：朝水宗彦、有村貞則、内田恭彦、新祖隆志郎、石龍潭、立山紘毅、角田由佳、寺地伸二、成富敬、渡邊幹雄、小林友則、齋藤英智、田畑雄紀、野村淳一、八代拓、山本勝也

○具体的な実施内容

まず東アジア研究叢書第7巻、山口大学院東アジア研究科編『東アジアのパンデミック』中央経済社、公刊・実績とした。同書にはアジア各国の論客と「メンバー」からは朝水、石（翻訳）、立山、八代各先生と浜島が執筆し、古賀研究科長が巻頭言を書いている。同書は2023年3月18日開催の同タイトルの国際シンポジウムに基づいている。尤も言うまでもなく研究経費が同書刊行に直結しているわけでは必ずしもないが、このプロジェクトに関連することとして掲げられるべきだろう。

他にはメンバー各自がそれぞれの研究に沿って成果を挙げている。但し、今回、プロジェクト研究名を絞ったためか、同研究名に沿った報告が中心に行われ、成果実績が全て報告されておらず、実際はもっと多い。

○波及効果

同研究叢書ならびに同国際シンポジウムには、中国、マレーシア、バングラデシュから参画者があり、また国内外から大学院生も含めて多くの参加者があり、同書の刊行を通じてより多くの研究者・学生・市民へと波及効果が期待できよう。これ以外にも各メンバーがそれぞれの個別・共同研究を（文責者の知る範囲を超えて）行なっており、その波及効果が期待できよう。また事業計画書で言及したような、アジア関連機関との組織的な締結等というよりも、関連機関所属研究者を含む国内外の人々との交流は行なわれていると確信する。

○今後の方向性

このテーマ「東アジアを中心とする世界経済社会に対する感染症問題の影響」は、2023年度の国際シンポジウム「東アジアのパンデミック」そして2024年度の同タイトルの研究叢書の公刊をもって一区切りとすることとなるだろう。

今後の方向性としては、「アジア・太平洋における経済・経営・イノベーション」と銘打ち、以前のプロジェクト研究がそうであったように、幅広く裾野を拡げて、各自が研究に取り組みまた共同研究を行なっていくことが社会動態講座会議にて話し合われ合意を得ている。更に今後、研究テーマの絞り込みをしていくことになろう。